

評判操作の発達 —比較症候群アプローチによる検討— (中間報告)

専修大学	池田彩夏
自治医科大学・日本学術振興会	白野陽子
白鷗大学	浅田晃佑
自治医科大学	池田尚広
自治医科大学	山形崇倫
自治医科大学	平井真洋

Examination of development of reputation management by cross-syndrome approach

Senshu University,	IKEDA, Ayaka
Jichi Medical University & Japan Society for Promotion of Science,	HAKUNO, Yoko
Hakuoh University,	ASADA, Kosuke
Jichi Medical University,	IKEDA, Takahiro
Jichi Medical University,	YAMAGATA, Takanori
Jichi Medical University,	HIRAI, Masahiro

要約

本研究では、評判操作の発達的变化を症例間で比較することにより、評判操作の発達メカニズムを明らかにすることを目的とする。具体的には、定型発達児に加え、社会的コミュニケーションや社会性に困難が伴うとされる自閉スペクトラム症児と希少遺伝性疾患であり過度の社会性を有するとされるウィリアムス症候群児を対象に、評判操作課題を実施する。これにより、評判操作の発達に与える社会的動機づけおよび他者の心的状態の理解の影響を明らかにすることを目指す。

【キー・ワード】 評判操作, お世辞, 自閉スペクトラム症, ウィリアムス症候群

Abstract

This study aims to clear the developmental mechanism of reputation management by comparing the development of reputation management among syndromes. Specifically, we examine typically developing children in addition to children with autism spectrum disorders, who have difficulty in social communication and sociality and children with Williams syndrome, who have excessive sociality. By comparing performance of

reputation management tasks among 3 types of children, we try to reveal the impact of social motivation and understanding of others' mental state on the development of reputation management.

【Key words】 reputation management, flattery behavior, autism spectrum disorders, Williams syndrome

問題と目的

私たちの日々の生活において、他者から査定を受けること、そして他者を査定することは、避けては通れない。他者から与えられた、ある人ないし対象の特性や属性についての査定とは、すなわち評判である。私たちは、他者との関係性を維持、向上させるため、自分自身の評判を気に掛けるだけでなく、自己呈示や印象操作を用いて、自分についての他者の評価を戦略的に操作しようとする。これは評判操作 (*reputation management*) と呼ばれ、その方法は 2 種類あるとされる。1 つは自分の評判を高める方法であり、自分のポジティブな評判が広まり、ネガティブな評判が広まらないようにするための行動である。もう 1 つは、他者の評判を高める方法であり、お世辞を言う、もしくは自分のことを卑下するなどの行動である。

では、評判操作はいつ頃、どのようなメカニズムで発現するのだろうか。評判操作の発達メカニズムの解明にあたって、現在、2 つの方向性からの検討がなされている。1 つは、定型発達児を対象に、評判操作の発現時期や評判操作が行われる状況を明らかにするものである。先行研究によると、定型発達児では評判への関心は 5 歳ごろに獲得されることが示されている (Engelmann, Herrmann, & Tomasello, 2012; Takagishi, Fujii, Koizumi, & Okada, 2015; 奥村・池田・小林・松田・板倉, 2016)。もう 1 つは、非定型発達者と定型発達者との比較であり、社会的コミュニケーションに困難を抱えることとされる自閉スペクトラム症 (ASD) 者では、評判操作がみられないことが報告されている (Izuma, Matsumoto, Camerer, & Adolphs, 2011; Chevallier, Molesworth, & Happe, 2012)。評判操作の発現時期が、他者の心的状態の表象能力である心の理論の獲得時期 (4-5 歳) と一致することに加え、心の理論へ理解が乏しい ASD 者で評判操作がみられないことから、評判操作の発現には、心の理論の獲得が影響している可能性が指摘されている。一方で、心の理論をもたない魚も評判操作を行うことから (Tennie, Frith, & Frith, 2012)、心の理論は評判操作には影響しない可能性も指摘されている。また、評判操作発現には心の理論ではなく、社会的な動機づけが重要であるという考えも提唱されている (Chevallier, et al., 2012)。しかしながら現在まで、評判操作がどのような発達メカニズムで発現し、発達するかに関しては、明確な答えが出ていない。

そこで、本研究では、評判操作の発現およびその発達に与える、他者の心的状態の理解と社会的動機づけの影響を検討する。この問いを明らかにするために、複数の非定型発達児を対象とする「比較症候群アプローチ (*Cross-syndrome approach*)」を用いて検討を行う (Karmiloff-Smith et al., 2012)。近年、社会的認知発達の研究では、希少遺伝性疾患であり過度の社会性を有するウィリアムス症候群 (WS) 児と社会的コミュニケーションに困難を有するとされる ASD 児を比較するアプローチが注目されている。ASD 児と WS 児はともに他者の心的状況の理解が不得手であることが報告されている

(Baron-Cohen, Leslie & Frith., 1985; Tager-Flusberg & Sullivan, 2000) ことを踏まえると、ASD 児と WS 児を対象にすることにより、評判操作の発現に必要な要因を切り分けることが可能となる。すなわち、ASD 児及び WS 児がともに評判操作を行わないならば、評判操作の発現には、他者の心的状況の理解が重要だと考えられる。一方、ASD 児は評判操作を行わないが、WS 児では評判操作を行うのであれば、評判操作の発現には社会的動機づけが重要であると推測できる。なお、本研究では、自己に関する評判操作と他者に関する評判操作の 2 種類の評判操作を同時に扱うことにより、評判操作の発達メカニズムの包括的な解明を試みる。

方 法

参加児 3-12 歳の定型発達児、自閉スペクトラム症児、ウィリアムズ症候群児を対象とする。

倫理的配慮 本研究の実施にあたり、所属機関（専修大学）および調査実施機関（自治医科大学）の倫理委員会の承認を受けた。また、調査の実施に先立ち、保護者に調査の内容を説明し、書面にて同意を得られた幼児を対象に課題を実施する。

課題 1：自己に関する評判操作の検討

奥村ら（2016）のシール分配課題を用いて検討する。実験者は、参加児に 10 枚のシールを提示しながら、それらが他の子供に渡す予定のシールであること、他の子供にシールを渡すために、参加児にはシールを封筒に入れる作業を手伝ってもらいたいことを説明する。この際、シールは全て他の子供のものであるが、もし参加児が欲しければ、参加児の名前が書いてある封筒にシールを入れれば、参加児のものになると教示する。参加児が教示を理解したら、シールを封筒に入れるよう促す。

条件：観察者あり条件と観察者なし条件の 2 条件を設定する。観察者あり条件では、実験者が参加者の隣で、参加児がシールを分配する様子を観察する。観察者なし条件では、実験者は退室し、参加児は誰からも観察されていない状況でシールの分配を行う。

分析：自分のものとしたシールの枚数を求め、条件間・症例間での比較を行う。評判操作を行うのであれば、観察者あり条件よりも、観察者なし条件において、自分のものとするシールの枚数が多くなると予測される。

課題 2：他者に関する評判操作の検討

Fu & Lee (2007) で用いられた、イラスト評価パラダイムを改良し、他者の評判を高める行動がみられるかを検討する。参加児は、2 枚 1 組のイラストを 2 組提示され、イラストの評価を求められる。イラストのうち、1 組は統制条件、もう 1 組は実験条件として使用される。まず、調査者 A が、2 組のイラストを 1 組ずつ参加児に提示し、それぞれ、どちらのイラストが上手だと思うかを参加児に尋ねる。次に実験者 A は「忘れ物をした」と言って退室し、入れ替わりで実験者 B が入室する。実験者 B は、参加児に何をしていたかを尋ねた後、参加児が上手だと思うイラストを尋ねる。この際、統制条件のイラストについては、どちらが上手かを聞くだけであるが、実験条件のイラストに関しては、

参加児が「上手な絵」として選択しなかったイラストを指差し、実験者 B が描いた絵であることを告げた後に、どちらのイラストが上手だと思うかを尋ねる。

分析：他者に関する評判操作を行うのであれば、実験条件のイラストに関して、実験者 B に質問された時には参加児が「上手な絵」として選択しなかったイラストを上手な絵として選択すると考えられる。

手続き

参加児と十分にラポールを取ったのち、課題 1、課題 2 の順で課題を実施する。また、PVT-R（上野・名越・小貫, 2008）を実施し、語彙年齢の計測を行う。保護者には、AQ 日本語版（児童用）に回答していただく。

現在の進捗状況

現在、データ取得中である。データ取得が終了し次第、分析を行う。

引用文献

- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37-46.
- Chevallier, C., Molesworth, C., & Happe, F. (2012). Diminished social motivation negatively impacts reputation management: autism spectrum disorders as a case in point. *PLoS one*, 7: e31107.
- Engelmann, J.M., Herrmann, E., & Tomasello, M. (2012). Five-year olds, but not chimpanzees, attempt to manage their reputations. *PLoS ONE*, 7: e48433.
- Fu, G., & Lee, K. (2007). Social grooming in the kindergarten: The emergence of flattery behavior. *Developmental Science*, 10, 255-265.
- Fujii, T., Takagishi, H., Koizumi, M. & Okada, H. (2015). The effect of direct and indirect monitoring on generosity among preschoolers. *Scientific Reports*, 5: 9025.
- Izuma, K., Matsumoto, K., Camerer, C. F., & Adolphs, R. (2011). Insensitivity to social reputation in autism. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108, 17302-17307.
- Karmiloff-Smith, A., D’souza, D., Dekker, T., Van Herwegen, J., Xu, F., Rodic, M., & Ansari, D. (2012). Genetic and environmental vulnerabilities: the importance of cross-syndrome comparisons. *PNAS*, 109, 17261-17265.
- 奥村優子, 池田彩夏, 小林哲生, 松田昌史, & 板倉昭二. (2016). 幼児は他者に見られていることを気にするのか: 良い評判と悪い評判に関する行動調整. *発達心理学研究*, 27, 201-211.
- Tager-Flusberg, H., & Sullivan, K. (2000). A componential view of theory of mind: evidence from Williams syndrome. *Cognition*, 76, 59-90.

Tennie, C., Frith, U., & Frith, C. (2010). Reputation management in the age of the world-wide web. *Trends in Cognitive Sciences*, 14, 482–488.

上野一彦・名越芥子・小貫悟（2008）PVT-R 絵画語い発達検査 手引き．日本文化科学社．

